



森と海からの手紙

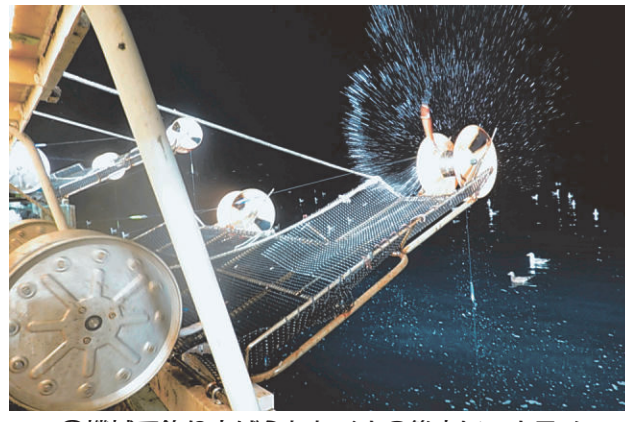
★6便★



この夏、少年期を過ごした岩手県釜石市に向けて、東京から東日本大震災の被災地を車で北上しながら、「人と自然が、乖離している」との思いを強くした。総延長距離431キ。海岸線に連なる防潮堤が、視界から海を遮っていた。宮城県では、津波が川を遡上した地点まで防潮堤が築かれて、河口の生き物のすみかが奪われた。「海が見えなくて、その豊かさや荒々しさを、未来に伝えることはできねえ」

岩手・釜石

人と自然 遮る防潮堤



①機械で釣り上げられたイカの後方に、カモメが群れていた②カヤックで海にこぎ出し、ご満悦の小学5年生—いずれも岩手県釜石市で



震災、不漁…「海」知らぬ若者

住民の総意として高台移転をし、防潮堤の建設を拒んだ同県気仙沼市舞根地区の畠山信さん(44)の言葉で思い出す。震災から10年の年に、一緒に宮城から青森に至る防潮堤をたどったが、建設を撤回させたのは、舞根の他に岩手県の小さな漁村を数えるだけだった。

堤で見えなくなった現実を、目の当たりにしてきた。釜石の町を歩くと、いたるところで「鉄と魚とラグビーの街」という看板を目にする。製鉄所が隆盛期を支えた町は、1989年に溶鉱炉の火が消えて以来、人口が減少。60年代半ばに9万人を超えた人口は、今では3万人を割り込みそうな状況だ。

前年未到の日本選手権7連覇の偉業を成し遂げた新日鉄(現・日本製鉄)釜石のラグビー部は、地域のクラブチームに転じたが、往時の勢いは望めない。漁業も、衰退が著しい。港 宮古 釜石 気仙沼」と歌われ、かつては岩手県屈指の水揚げを誇った釜石は、漁船の数が減った。震災後に巨額の

復興資金で再建された魚市場も閑散としている。「三陸の海の幸」とされたサンマとサケとイカは不漁続きで、温暖化に伴う海流の変化が要因に挙げられている。

川面を埋めていた風景は、今ではほとんど見られなくなった」と、住民たちは口をそろえる。「温暖化などの気候変動で、千島列島に沿って南下する栄養価に富む親潮が、三陸沖まで届かず、餌のプランクトンも激減して、稚魚が十分に成長できずに、多くが死んでしまうようです」

「産卵で戻ったサケが、川面を埋めていた風景は、今ではほとんど見られなくなった」と、住民たちは口をそろえる。

最後の一隻になった「第11福徳丸」のイカ釣り漁に同行させてもらったのは、7月31日だった。夕刻に出港。外洋にある三貫島近くにいかりを下ろし、日没とともに漁が始まる。目がくらむほどのライトの光が集まったイカを、鈴なりにつけた疑似餌をしやくって釣り上げる。数匹離れた陸地から光を目がけて飛来した方の大群と、小魚を求めて集まった数百羽のカモメが飛び交う情景に、息をのむ。

「30歳でイカ漁を始めた時は、まだまだイカが取れていた。今日はそれなりに取れたとも、最近是不漁続きだ。成人した息子に、後を継ぐとはいえないな」。船長の藤原泰士さん(53)は頭を振った。

植町の東京大気海洋研究所大槌沿岸センターで、サケの研究を続ける大場理幹さんの見方だ。そして、最盛期の昭和40年代には50隻を数えた釜石湾のイカ釣り船は、今年、最後の一隻になった。夜間、高台から望む水平線に、光の弧を描いたイカ釣り船のいさり火は、今は昔の物語である。

泰士さんの子ども時代は、夏になれば浜に子どもたちの歓声が響いていた。「物心がつく頃には、近所の兄ちゃんたちに海遊びを教わり、素潜りでウニなどを取って遊びほうけた。だけど、震災とコロナ騒ぎで、今の若い連中は海遊びを知らずに育った。それに、学校は『子どもだけで海遊びしちゃダメだ』というじゃないか。これじゃあ、浜っ子は育たないべ」。泰士さんの憂いである。

私の友人が経営するシーカヤックショップには、今年も子どもたちがやって来た。その中には不登校や引きこもりがちの子も多かった。最初は、腰が引けていた彼らも、カヤックでこぎ出すと、海にハグされて笑みを取り戻した。上陸した浜では、磯遊びに興じる大人の後を追って、歓声を上げて泳ぎ始めた。

カヤックショップの名は「MESA」。「前に進め」の思いが込められている。「人でも多く、浜っ子を養成してえもんだな」。津波で流された店を再建したオーナーの草山雅之さん(66)の思いである。

【委員編集委員・萩尾信也】毎月第3火曜掲載